

模擬保育における二段階振り返りの実践

—模擬保育実施直後と映像視聴および他者評価を踏まえた記述内容の分析—

小 槻 智 彩

A Practice of Two-Stage Reflection in Simulated Childcare Teaching

—An Analysis of Reflective Descriptions Immediately After Practice and After Video Viewing and Peer Feedback—

Chisa OZUKU

長崎女子短期大学紀要 第51号 令和7年度 別刷

Reprinted form

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 51 : 39 – 46

2026

論 文

模擬保育における二段階振り返りの実践

—模擬保育実施直後と映像視聴および他者評価を踏まえた記述内容の分析—

小 槻 智 彩

A Practice of Two-Stage Reflection in Simulated Childcare Teaching

—An Analysis of Reflective Descriptions Immediately After Practice and After Video Viewing and Peer Feedback—

Chisa OZUKU

キーワード：模擬保育、映像視聴、他者評価

1. 問題と目的

模擬保育は、保育者養成課程において実践的な学習を目的として位置付けられる学習活動である。具体的には、授業内で保育者役・子ども役・観察者などの役割に分かれて行われるロールプレイ型の活動であり、保育実践を模した体験的学習の機会を提供する。保育教材の研究や指導案作成は机上で行うことが可能であるが、具体的な状況を想定できなければ、実践的な配慮を記述することは困難である。そのため、模擬保育を通して実践場面を想定した学習を行うことにより、総合的な「保育実践力」を身に付けることが目指される¹⁾。また、単なる計画の実行だけでなく、保育者の声の大きさ、表情、立ち振る舞いといった非言語的な技術の習得も重要な要素となる。

総合的な保育実践力の向上には、模擬保育後の振り返りが重要である。一般に、模擬保育の実施に際して学生は、①指導案の作成、②模擬保育の実践、③実践の評価という過程を経験する¹⁾。保育現場では、保育者が自らの保育実践を振り返り、指導計画とその展開、環境の構成、子どもへの関わりや配慮について考察し、その結果を今後の保育の改善・充実に生かすことが重視されている²⁾。これと同様に、保育者養成課程においても、教職課程コアカリキュラム³⁾では、「保育内容の指導方

法」に関する到達目標の一つとして、「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」ことが示されており、保育実践後の振り返りの重要性が位置付けられている。

模擬保育実践者が自らの模擬保育を振り返る方法には、評価内容や振り返りの方法の違いに基づき、いくつかの形態が存在する。第一に、評価内容については、実践を通して気付いた点を自由に挙げるものや、あらかじめ教示された視点（環境構成や活動内容の設定、保育者の援助、声の大きさなど）に基づいて評価するものがある。後者の場合、自由記述による評価に加え、評価項目に対して段階的に評価する方法が用いられることもある⁴⁾⁵⁾。また、振り返りの方法としては、記述式による振り返りや、口頭による意見交換が用いられる。

第二に、模擬保育の振り返りにおいては、実践を想起して行う方法に加え、ICTを活用した方法が用いられることもある。ICT活用の代表的な例として、ビデオカメラによる動画撮影が挙げられる。模擬保育の実施風景をビデオカメラで撮影し、模擬保育終了後にその映像を視聴して振り返りを行う実践が報告されている⁴⁾⁵⁾⁶⁾。中川（2021）では、映像視聴後の振り返りにおいて、模擬保育直後の自己評価と比較して記述数が増加

し、より詳細な振り返りが行われていること、また、模擬保育直後の評価と比べて否定的評価を行う記述数が増加し、批判的省察が促されたことが報告されている。このように、模擬保育を外から俯瞰的に観察することは、自身の模擬保育実践を客観的に捉え直すことを可能にすると考えられる。

第三に、模擬保育の振り返りでは、模擬保育の実践者による自己評価に加え、他者評価が行われることも多い。他者評価では、模擬保育に子ども役として参加した立場や、模擬保育を外から観察する立場から、模擬保育の内容や進行について評価が行われる。受講学生数の規模によっては、保育者役を経験できる学生の人数が限定されてしまう実践が多いことが指摘されており⁷⁾、その場合には、保育者役以外の受講生が子ども役や観察者として模擬保育に参加することになる。こうした実践においては、それぞれの立場（保育者役・子ども役・観察者）に応じて異なる視点からの学びが得られていることが報告されており⁸⁾、他者による評価を受けることは、模擬保育の実践者が自らでは気づきにくい視点を獲得するうえで有効である。

第四に、模擬保育の振り返りは、実施する時点の違いにより複数の方法が認められる。振り返りは、模擬保育の実施直後に授業内で行われる場合や、授業外の時間を用いて行われる場合があるほか、授業内と授業外の両方で段階的に行われることもある。先述した中川（2021）では、模擬保育終了後に自己評価および他者評価を行い、全グループの模擬保育終了後には、それらの評価を項目ごとに整理した資料を受講生に配布したうえで、模擬保育映像を視聴し、再度自己評価および省察を行うことが課されている。また、紺谷（2024）では、模擬保育終了後にそれぞれの立場から振り返りを記入したうえで、自宅課題として模擬保育映像を視聴し、改めて振り返りを行う実践が報告されている。さらに、模擬保育直後の振り返りと、全体振り返りを行った後に提出された最終レポートを比較した上月（2019）の報告では、模擬保育直後の振り返りでは言及が少なかった「ねらい・内容の設定に関すること」「環境構成に関するこ

と（人的）」「事前準備・事前練習全般に関すること」「子どもの姿の予想に関すること」への気づきが大きく増加していたことが示されている。これは、全体での振り返りを通して受講生同士の気づきの交流や教員による講評が行われたことにより、模擬保育直後の個人による振り返りでは捉えきれなかった観点が可視化されたためであると指摘されている。

これらの先行研究から、模擬保育後の振り返りについては、模擬保育直後の内省に加えて、自らの模擬保育映像を視聴することによる実践の客観視や、他者による評価を踏まえた再検討を行うことで、より詳細で批判的な振り返りが促されることが示されている。一方で、授業内において模擬保育の実施時間を確保するとともに、自己評価・他者評価や映像視聴の時間を十分に設けることには、授業時間の制約という課題がある。そこで本実践では、授業内で模擬保育を実施した直後に自己評価および全体検討を行い、その後、授業後課題として模擬保育実践者が模擬保育映像および他者評価を視聴・閲覧したうえで再振り返りを行う、二段階の振り返りを設定した。本研究では、模擬保育直後の振り返りと、模擬保育映像および他者評価を踏まえた振り返りの記述内容を比較し、二段階の振り返りが受講生の振り返りの在り方どのような特徴をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

2.1. 授業の概要

授業科目 保育者養成を行う短期大学において、2024年度に開講された「領域『人間関係』の指導法」（2単位）の授業内で実施された模擬保育を対象とした。本科目は、幼稚園教諭二種免許状および保育士資格取得のための選択必修科目であり、2クラスに分かれて開講された。

対象者 受講生は2年生67名であった。受講生に対しては、当該科目の成績評価終了後、模擬保育に関して提出された課題の記述内容を研究目的で利用すること、ならびに分析に際して個人を特定できる情報は含めないことについて、電子メール

表 1 授業展開

授業回	授業内容		
1 - 8	講義		
9 - 11	模擬保育の準備	グループ編成 模擬保育の計画、指導案作成、保育準備	
12 - 14	模擬保育の実施	準備	5分
		模擬保育の実施①	15分
		片付け・個人による振り返り・全体検討	20分
		準備	5分
		模擬保育の実施②	15分
		片付け・個人による振り返り・全体検討	20分
15	模擬保育の実施	準備	5分
		模擬保育の実施	15分
		片付け・個人による振り返り・全体検討	20分
授業内試験			

注) 全体検討では、模擬保育グループによる振り返りの発表、事前に各立場から1 - 2名指定された保育者役以外の受講生による感想の発表、ならびに授業担当者による講評を行った。

により説明を行い、同意を得た。

開講時期 2024年度前期（4月 - 7月）に開講された全15回の授業であった。第1回から第8回までは講義形式で授業を実施し、第9回から第11回にかけて模擬保育の準備を行い、第12回から第15回に模擬保育を実施した（表1）。なお、当該科目の受講生は6月に10日間の教育実習を行っており、一部の受講生は実習期間中に設定保育を経験していた。

2.2. 模擬保育の準備

第9回の授業内において、受講生のくじ引きにより、4名または5名で構成されるグループを7つ編成した。各グループは、第9回から第11回までの授業時間内および授業時間外に模擬保育の準備を行った。模擬保育に関する指示内容は、①対象年齢および時期の設定は自由とし、領域「人間関係」の内容のいずれかを踏まえた活動を計画し、指導案を作成すること、②指導案には、活動に主に関わる領域「人間関係」の内容を記載すること、③模擬保育の実施時間は15分とすること、④模擬保育実施時には、他の受講生の一部が保護者役を担当するため、保護者が参加する活動を計画してもよいこと、の4点であった。子ども役と保護者

表 2 模擬保育で計画された対象年齢および活動内容

クラス	グループ	対象年齢	活動内容
A	1	5歳児	はらぺこあおむしの製作
	2	4歳児	○×クイズ
	3	4歳児	あじさいの製作
	4	5歳児	カードめくりゲーム
	5	5歳児	天の川の製作
	6	4歳児	王様じゃんけんゲーム
	7	5歳児	ジェスチャーゲーム
B	1	4歳児	七夕の短冊作り
	2	4歳児	新聞紙じゃんけんゲーム
	3	4歳児	新聞紙ボールで陣地取りゲーム
	4	4歳児	猛獣狩りゲーム
	5	5歳児	ストローとんぼの製作
	6	5歳児	宝探しゲーム
	7	3歳児	かたつむりの製作

役はペアとし、保護者役は、ペアとなった子どもの保護者の視点で参加することを説明した。実際の模擬保育で行われた活動内容を表2に示す。

2.3. 模擬保育の実施

模擬保育は第12回から第15回にかけて実施した。第12回から第14回は1回につき2グループが模擬保育を行い、第15回は1グループが実施した。1グループあたりの時間配分は、準備5分、模擬保育の実施15分、片付け・個人による振り返り・全

体検討20分の計40分であった。模擬保育において、学生は保育者役、子ども役、保護者役、保育者対象の観察者、子ども対象の観察者のいずれかの立場に分かれて参加した。そして、模擬保育終了後には、各立場から振り返り用紙への記入を行った。模擬保育実践の撮影および記録は、授業担当者がビデオカメラを用いて行った。撮影は、模擬保育全体が確認できる位置にビデオカメラを設置して実施した。

2.4. 模擬保育の振り返り

本授業で実施した模擬保育の振り返り内容を表3に示す。

授業内での振り返り 各模擬保育終了後、受講生は個人で振り返り用紙に記入した。保育者役を受講生は、自身の模擬保育についてグループ内で意見を共有した後、①模擬保育を行った感想、ならびに②指導案から変更した点など、他の受講生に説明が必要な点を記入した。一方、保育者役以外の受講生は、それぞれの立場から、①良かったと考える点、②気になった点を記入したうえで、③子ども役および保護者役は活動中の気持ちや感じたことを、観察者は指導計画および活動について

気付いた点を記入した。

個人での振り返り終了後、全体で模擬保育に関する検討を行った。はじめに、模擬保育を実施したグループが、①模擬保育を行った感想、ならびに②指導案から変更した点など、他の受講生に説明が必要な事項について発表した。続いて、他の受講生が感想を共有した。発表者は、模擬保育ごとに授業担当者が各立場から1-2名の受講生を指定し、授業開始時に通知した。全ての受講生が、全7グループの模擬保育を通して必ず一度は発表するよう調整した。最後に、授業担当者が領域「人間関係」の内容を踏まえた講評を行った。個人で記入した振り返り用紙は授業終了後に提出された。

授業後の振り返り 保育者役を受講生には、授業後課題を課した。保育者役を受講生は、自身の模擬保育映像を視聴し、授業内で行われた全体検討および授業後に提出された保育者役以外の受講生による記述内容（他者評価）を踏まえて、自身の模擬保育実践について再度振り返りを行い、その内容を提出した。模擬保育映像および全受講生の振り返り（自己評価・他者評価）は、授業担当者が授業で設定している学習管理システム Classroom 内に受講生が閲覧可能なデータとして保存

表3 模擬保育の振り返り

模擬保育に参加した立場	振り返り時点	振り返り内容	分析データ
	授業内	模擬保育の振り返り	データ A
		①模擬保育を行った感想 ②指導案から変更した点など、他の受講生に説明が必要な点	
保育者役		模擬保育映像の視聴	
	授業後	他受講生が提出した模擬保育の感想（他者評価）の確認 模擬保育の再振り返り ①模擬保育映像、授業内での全体検討、および他の受講生の感想（他者評価）を踏まえた振り返り ②授業全体に関する感想	データ B
保育者役以外	授業内	それぞれの立場から模擬保育の振り返り ①良かったと考える点 ②気になった点 ③子ども役および保護者役は活動中の気持ちや感じたこと、観察者は指導計画および活動について気付いた点	
	授業後	-	

注) 下線部は分析対象

した。保育者役の受講生は、Google フォームを用いて、①模擬保育映像の視聴、授業内での全体検討、および他者評価を踏まえた振り返り、②授業全体に関する感想について回答した。

2.5. 分析対象

受講生が保育者役として授業内に提出した振り返りのうち、①模擬保育直後の感想の記述内容(以下、データA)、ならびに、授業後課題のうち、②模擬保育映像の視聴、授業内での全体検討、および他の受講生の感想(他者評価)を踏まえた感想の記述内容(以下、データB)を分析対象とした。

データAおよびデータBは、受講生ごとに対応づけたデータセットとして扱った。授業内または授業後のいずれかを提出していない受講生、ならびに未回答が含まれる受講生のデータセットは分析対象外とした。その結果、57名分のデータセットを分析対象とした。

2.6. 分析方法

分析対象であるデータAおよびデータBについて、記述内容から言及されている観点を抽出した。そのうえで、各感想において、どの観点が言及されているかを整理した。

3. 結 果

3.1. 記述の観点

記述内容において言及されている観点を、6つに整理した。各観点および記述例を表4に示す。なお、保護者への声かけや保護者の活動参加など、保護者のみに関する言及は分析対象に含めないこととした。教材や活動内容、事前準備、環境構成に関する記述は「活動・環境」の観点とした。子どもへの応答や声かけ、個別的な対応、説明の仕方や保育者の立ち位置に関する記述は「子どもへの関わり」の観点とした。時間配分や活動の流れ、活動の区切りに関する記述は「時間管理・進行」の観点とした。役割分担、事前の練習や打ち合わせ、共通認識、ならびに模擬保育中の保育者同士の連携に関する記述は「保育者同士の連携」の観

点とした。緊張や不安、焦り、説明内容や手順の記憶など、模擬保育中の内面に関する記述は「保育者の心理」の観点とした。声の大きさや抑揚、表情など、保育者が表出する行動に関する記述は「保育者の表現」の観点とした。

3.2. 記述内容の比較

データA(授業内記述)およびデータB(授業後記述)において、各観点到に言及した人数および割合を表5に示す。まず、授業内感想についてみると、最も高い割合で言及されていた観点は「子どもへの関わり」(27.1%)であり、次いで「活動・環境」(20.3%)、「時間管理・進行」(19.5%)の順であった。授業後感想においても同様に、最も高い割合で言及されていた観点は「子どもへの関わり」(25.9%)であり、次いで「活動・環境」(24.1%)、「時間管理・進行」(20.7%)の順であった。また、記述に含まれる観点数の総数は、授業内の振り返りは118個、授業後の振り返りは116個であった。

振り返りの時点と、言及された観点数との関連について、 χ^2 検定を行った。その結果、有意な関連は認められなかった($\chi^2(5)=2.59, n.s.$)。

表5 各観点数の言及数とその割合

観点	授業内 (N=118)		授業後 (N=116)	
	n	%	n	%
活動・環境	24	20.3%	28	24.1%
子どもへの関わり	32	27.1%	30	25.9%
時間管理・進行	23	19.5%	24	20.7%
保育者同士の連携	12	10.2%	15	12.9%
保育者の心理	21	17.8%	13	11.2%
保育者の表現	6	5.1%	6	5.2%

4. 考 察

本研究では、模擬保育直後の振り返りと、映像および他者評価を踏まえた振り返りの記述内容を比較することを通して、二段階の振り返りにおける受講生の振り返りの在り方について検討した。その結果、振り返りで言及された観点は、「活動・環境」「子どもへの関わり」「時間管理・進行」「保育者同士の連携」「保育者の心理」「保育者の

表4 模擬保育の振り返りに関して言及された観点と記述例

観点	内容	記述時点	記述内容
活動・環境	教材、事前準備、活動内容、環境構成	授業内	油性ペンだったため、机からはみ出してしまうこともあるという事を考えて机の上に新聞紙を準備しておくべきだった。
		授業後	作り方が難しいという点やトンボの飛ばし方が難しいという点が多くの人々の感想に書かれていたので工夫が必要だと思った。作り方に関しては絵カードなどを黒板に貼っていても作り方が視覚的に分かるものを作れば良いと思った。また、実際に遊んでみて飛ばせない子もいたので、トンボ自体をもう少し小さくして軽くするなどの工夫ができるので模擬保育をしてみても良かった。
子どもへの関わり	子どもへの声かけ、応答、配慮や援助、説明、立ち位置	授業内	子どもたちを座らせるところが難しかった。伝えたつもりでも受け取り方が違う場合もあるので、そこが難しかった。反応がないときの対応の仕方が難しく感じた。
		授業内	新聞紙を丸くして投げるあそびに注意事項を説明しておらず。顔や、頭にあたっていたので、言うべきだったところが反省点です。
		授業内	説明をホワイトボードや実際の紙でしたり、完成した物を見せたりなどの工夫ができてよかった。飛ばす際に、飛ばせない子への声かけなどが大事だと思った。
		授業後	時間を気にしすぎてしまい、指のりの使い方など説明不足なところがあった。動画を見た際、作りながら説明をする時にホワイトボードに貼りながら説明をすると子どもが見やすいと感じた。また絵カードを作ることで子どもも分かりやすく作れると思った。
		授業後	手遊びを急に始めるのではなく知らない子もいる想定でやり方を皆でやったところが工夫したところである。そのおかげもあってみんなで楽しく手遊びができたのでよかった。
		授業後	活動の時に歌っている最中は歩き回ってほしかったのが子どもにあまり伝わっておらず少し説明不足だったと思った。また、仲間を集められなかった子どもがどういう気持ちになるのかそこまで考えておらずもう少し声かけや援助をしてあげたらよかったなと思った。
時間管理・進行	時間配分、活動の流れ、活動の区切り	授業内	流れを確認してはいたけれど、スムーズにいかなかった。製作物を配る時等思っていない所で時間がかかった。
		授業後	製作の時間が思ってきたよりも長くて時間内に終わることが出来ず、曖昧に終わってしまった。
保育者同士の連携	役割分担、事前練習や打ち合わせ、共通認識、保育者同士の連携	授業内	まだまだ事前練習が足りなかったなと思ったのと、細かい部分の打ち合わせができていなかったので変な間があった。思い通りに行かないことも何個もあったので、もっと練習をするべきだった。
		授業後	全体的に説明などでグダグダしていて、子どもたちにもそれが伝わってしまったのではないかなと感じました。5人全員がしっかり全体の流れを共通認識してないと起こり得る問題だと思うのでしっかり確認して、どのような言葉遣いをしたら子どもたちが分かりやすいかなども考えて活動しようと感じました。
		授業後	グループで役割はざっくり決めていて、あえて話す事も決めず即興で行う事に決めました。その場その場で「今自分が出るべき！」とそれぞれ動いていたので良かったと思います。
保育者の心理	緊張、焦り、不安、説明内容や手順の記憶	授業内	全員のことを知っていても、前に立つと緊張しました。現場に出ると今回以上に緊張すると思うので、入念な練習が必要だと思いました。
		授業後	緊張して言葉が棒読みになってしまっていたり、説明を飛ばしてしまったり、子供たちに語りかけるということができていなかったと思った。
保育者の表現	声の大きさ、抑揚、表情	授業内	声がかもれて聞こえなかった時があるように感じたため、全体の様子を伺いながらスムーズに進行していくことが大切だと感じた。
		授業後	自分たちが思っているよりも大きな声で話さなければ、子どもには聞こえないと感じた。ただ単に絵本を読むのではなく抑揚やリズムをつけて読んだ方がいいと思った。
		授業後	模擬保育の様子を視聴して、とても間が多いなと感じました。特に、製作の説明をしている時に、説明をしている私が見本を作る保育者を待たせてしまっているところがとても多かったのもうこれだけ時間が空いてしまっていたら、子どもたちの集中力を切らしてしまうことに繋がりそうだなと思いました。しかし、ハキハキとした説明や、挨拶、子どもたちへの言葉掛けなどはひとりひとり丁寧に関わることができていたなと感じました。

注) 記述に複数の観点が含まれる場合は、カテゴリと関連する箇所の下線を付している

表現」の6つに整理された。自由記述による模擬保育の振り返りにおいて、受講生はこれら複数の観点から模擬保育を振り返っていたことが示された。そのなかでも、「子どもへの関わり」や「活動・環境」の観点については多く言及されていた。また、模擬保育直後の振り返りと、映像および他者評価を踏まえた振り返りを比較した結果、振り返りの時点と言及された観点との関連は認められなかった。先行研究においては、映像視聴や他者評価を取り入れた振り返りにより、教材や活動内容、指導の構成など、模擬保育そのものに関する省察の質に変化が見られたことが報告されているが⁵⁾⁷⁾、本研究では同様の変化は確認されなかった。

振り返りの時点と言及された観点との関連が認められなかったことについては、いくつかの要因が考えられる。第一に、振り返りの記述が自由記述形式であった点が影響している可能性がある。実習未経験の学生が保育場面に関する映像教材を活用する際には、注目する内容に偏りが生じやすいことが指摘されている⁹⁾。本研究では、振り返りに際して特定の観点を事前に提示せずに記述を求めたため、受講生は模擬保育直後および授業後のいずれにおいても、比較的想起しやすい観点や自身が重視する観点を中心に記述した可能性がある。その結果、映像視聴や他者評価を経ても、言及される観点の分布に大きな変化が生じにくかったことが考えられる。

第二に、受講生が模擬保育直後の段階から、すでに「子どもへの関わり」や「活動・環境」といった模擬保育の中核となる観点に一定程度言及していた点も影響していると考えられる。このような状況では、授業後に映像視聴や他者評価を行った場合でも、言及される観点の種類そのものよりは、各観点における記述の具体性や視点の深まりといった質的側面に変化が表れやすかった可能性が示唆される。

第三に、本研究の分析では、観点ごとの言及の有無や頻度に着目しており、同一観点内における記述内容の変化までは十分に捉えられていない点が挙げられる。そのため、観点数という量的指標では差が確認されなかった一方で、記述の具体性

や批判性といった質的な変容が生じていた可能性も否定できない。実際に、中川（2021）では、振り返りの記述内容を「肯定的評価」「否定的評価」「主観的理由」「客観的理由」に分類して分析した結果、映像視聴を行うことにより、「教師行動」や「教材課題・教具」に対する否定的評価の記述数が増加したことが報告されている。今後は、観点別の言及数に加えて、同一観点内における評価の方向性や理由付けの変化といった質的側面を捉える分析方法を用いることにより、映像視聴や他者評価が振り返りに及ぼす影響をより多面的に検討する必要がある。

第四に、映像視聴を行った時点および映像視聴時の視点設定の違いが影響している可能性が考えられる。本研究では、模擬保育映像の視聴を授業後の個人課題として行った。模擬保育を映像教材化することにより、学習者が自宅課題として映像視聴や振り返りを行うことが可能となり、振り返りの量を確保するうえで有効であることが指摘されている¹⁾。一方で、中川（2021）では授業内で映像視聴を行っており、授業担当者や他の受講生との共有を通して、即時的な省察が可能な状況が設定されていた。また、上村（2010）では、模擬保育映像を活用したビデオカンファレンスの有効性が示され、保育者の援助に関する良さや気付きが多く得られたことが報告されている。これらの実践では、映像視聴が個人学習にとどまらず、他者との対話や授業担当者の関与を伴う学習活動として位置付けられていた点が特徴的である。これに対し、本研究では映像視聴を授業後の個人学習として設定したため、映像から得られる気付きが、観点別の言及としては変化しにくかった可能性がある。さらに、映像視聴に際して注目すべき視点を事前に明示しなかったことも、観点別の言及に変化が認められなかった要因の一つであると考えられる。今後は、映像視聴を行う時点を授業内に設定することや、映像視聴時に着目すべき観点をあらかじめ提示することにより、映像視聴が振り返り内容に及ぼす影響をより明確に検討する必要がある。

5. 本研究の課題と展望

本研究の課題と今後の展望として、主に三点が挙げられる。第一に、映像視聴の効果と他者評価の閲覧効果を区別して検討できていない点である。本研究では、授業後に映像視聴および他者評価を踏まえた総合的な振り返りを求めたが、先行研究において両者が省察を深める上で有効であることが指摘されている一方、それぞれの有効性の相違については十分に検討されていない。今後は、映像視聴と他者評価を段階的または分離して取り入れることにより、それぞれが振り返りに与える影響を詳細に検討する必要がある。第二に、模擬保育の展開時間に関する課題である。本研究では、全受講生が授業内で模擬保育を実践することを優先したため、1グループあたりの模擬保育時間は15分と短時間に設定された。他の実践研究で報告されているように、より長時間の模擬保育を行う場合には、言及される内容や省察の焦点が異なる可能性があり、この点についても今後の検討課題である。第三に、振り返りの方法に関する課題が挙げられる。本研究では、振り返りの際に注目すべき観点を事前に示さずに実施したが、それでも活動・環境や子どもへの関わり、時間管理など、複数の観点への言及がみられた。一方で、模擬保育を通じた実践力の向上をより効果的に促すためには、注目すべき観点を事前に共有したうえで、それらの視点から自他の模擬保育を省察する枠組みを設定することも重要であると考えられる。

6. 結 論

本実践研究の意義は、授業時間の制約があるなかで、模擬保育直後の振り返りと、映像および他者評価を踏まえた授業後の再振り返りを組み合わせた二段階の振り返りの実践を構成し、その効果を検討した点にある。本研究の結果、言及された観点の種類については、模擬保育直後の振り返りと授業後の振り返りとの間で有意な違いは認められなかった。このことから、本実践で用いた映像視聴や他者評価の導入は、新たな観点の獲得を直接的に促すものではない可能性が示唆される。

一方で、授業内外を組み合わせる振り返りの機

会を設定することにより、限られた授業時間の中でも映像視聴や他者評価を取り入れる実践的な方法を提示できた点は、模擬保育の振り返りの量を確保するという観点から、本研究の重要な成果である。また、観点数に変化が見られなかったという結果は、模擬保育における振り返りの効果を検討する際には、言及された観点の量的な変化だけでなく、同一観点内での記述内容の具体性や視点の深まりといった質的側面を捉える必要性を示している。これらの知見は、模擬保育実践における振り返りの方法や分析方法を再考するうえでの基礎的資料を提供するものであり、今後の保育者養成における効果的な保育実践の振り返りの在り方を検討するうえで意義を有すると考えられる。

引用文献

- 1) 紺谷遼太郎 (2024). 模擬保育における保育者視点映像利用の検討. 教育メディア研究, 31, 17-28.
- 2) 厚生労働省 (2020). 保育所における自己評価ガイドライン (2020年改訂版). <https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000631124.pdf>. (2026年1月5日閲覧)
- 3) 文部科学省 (2017). 教職課程コアカリキュラム. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf. (2026年1月5日閲覧)
- 4) 池田充裕 (2013). 模擬保育による学生の教授力・評価力の向上に関する取り組みと課題—ビデオ撮影による自己評価とピア評価・教員評価の効果の検証—. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 8, 61-72.
- 5) 中川希望 (2021). 模擬保育における授業評価や映像が省察に与える影響. 函館大谷短期大学紀要, 35, 17-23.
- 6) 上村晶 (2010). 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果. 高田短期大学紀要, 28, 89-100.
- 7) 上月智晴 (2019). 保育内容総論における模擬保育と学生の学び. 京都女子大学教職支援センター研究紀要, 1, 15-27.
- 8) 高橋一夫・山口香織・久保木亮子・塩津恵理子 (2020). 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察 (3). 教職課程・実習支援センター研究年報, 3, 117-128.
- 9) 大神優子 (2021). 保育学生の観察視点—保育場面の映像素材を用いて—. 和洋女子大学紀要, 62, 133-139.